



說教集



世界基督教統一神靈協会

豊田教会

2012.2.19



【訓読】

天国創建聖職のみ言

「これから、真の父母から、真の父母の息子娘、ここを中心とし全てが帰らなければならない。そのため今、私達が対話をするのは、『天国創建の為の終結式と始まりの式』、創建式をする時間がこの時間です。これは、だれもここにおいて責任をとることはできません。」

「火は一つである。二つではない。ろうソクの火も一つです。火を受けなければなりません。火を受けて、恩恵を、火を受けなければなりません。」

「全ての祝福家庭達は、この火を中心として一つにならなければならない。伝統の前に真の父母の血が連結されなければならない。このろうソクの火と連結され、千代万代天の家庭に侍って生きなければならない。このろうソクの火が消えない様にしなければならない。世界は訓読会の時間にろうソクを灯して聖和式をしなければならない。そうしてこそ、講演文に出てくる8大安息圏解放釈放天国になる。そのため一つの伝統と、血筋と似なくてはならない。あなた達はこのろうソクに火をつけて、このろうソクを伝授されなければならない。宗教団体（宗団）の責任者がこの火を中心にして教会、国、世界にこの灯が消えることのないよう、全て灯さなければならない。訓読会もろうソクの火を消さずにその場で行うようにする。」

天福聖塩のみ言

「このように一つにならなければなりません。天地人真の父母は唯一であり、二つではありません」と語られ、次のようにみ言をまとめられました。「あなたたちはそのように一つになった位置で、今から生活態度と生涯路程のプログラムをもう一度組んで、父母様と共に歩調を合わせなければなりません。それで、相続権を全て天に捧げて、もう一度受け取り、今回のDデーの父母様の結婚式と一緒に来て、天の国の印を父母様が受けて、あなた方に分けてあげれば、同じ位置で8代が一つになった同和、同族、同権時代に超えていくのです。そうしてこそ天地人真の父母の定着が終わるのです。そうしてこそ、自由にできるのであって、それができなければ永遠に引っかかります。」

昔に戻るようなそのような生活を二度としてはいけないことを新しく決心するために、手を高く挙げて、天を迎えるために、拍手で歓迎してください。天の祝福があることを願います。アージュ！」

【説教】

今年は、一つの伝統、一つの血筋、一つの似姿の人生を生きることがテーマです。そしてこの一年は金婚・禧年の特赦、総決算の年です。

今回、お父様が一つになるために、天国創建聖職・聖塩を私たちに伝授してくださいました。そのみ言として「全ての祝福家庭たちは、この火を中心として一つにならなければならない。伝統の前に真の父母の血が連結されなければならない。このロウソクの火と連結され、千代万代天の家庭に侍り生きねばならない。このロウソクの火を消さないようにしなければならない。」「昔に返るようなそのような生活を二度としてはいけないことを新しく決心するために、手を高く挙げて、天を迎えるために、拍手で歓迎してください。天の祝福があることを願います。アーヂュ！」以上のようにありました。

お父様に似ることは簡単ではありません。私たちが似る条件が氏族メシアです。氏族メシアの結論は私たちが父母になる事です。父母になるためには多くの試練を越えなければなりません。聖書にはヨブという信仰者の話があります。

人となりは正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者であり、神もヨブを誇り、ヨブに信頼を寄せていました。しかしサタンが試練をします。多くの万物、僕、そして子供たちまでも全て失ってしまいます。しかしこの時、ヨブは「私は、裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう」と言い、その時ヨブは神様を誇り、どうしてこうなるのか疑い、不信、不平を言う事がなかったのです。更に試練を与えます。全身に腫れ物だらけ、膿だらけの体となり、陶器のかけらで体中をかきむしって耐えられない様相でした。妻はヨブに「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神様を呪って死になさい」と。ヨブは「神から幸をうけるのだから、災いをも、受けるべきではないか」と言います。また、心配する3人の友達も、あまりの体のひどさに、あなたが神に何か罪を犯したからだと責めてきます。因果応報の内容です。信仰とは良い事とも悪い事も受け入れていく、災いにあっても神を信じて仰いでいくものです。

ヨハネによる福音書9章1節に生まれつき盲人の話が出てきます。弟子たちがイエス様に聞きます。「先生、この人が生まれつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」と。そのときのイエスの答えは、「本人が罪を犯したのでもなく、両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」というものでした。神のみわざ、つまり創造、救い、愛がそこにあるのです。

お父様もそうです。興南、ダンペリーの監獄で、神様を呪うことはされず、神の愛が、栄光がここにあると収監されながら、「神様、私は大丈夫です、心配しないでください」と親なる神様を慰めていかれます。

一つになる事は事情を越え、愛の因縁を強くし、孝行息子娘になる事です。そこに基準があります。私が越えなければ親なる神様が苦勞されます。

全てを受け止め愛と感謝にかえていくのが父母です。氏族の父母になる私達ですから、今ある環境の中に神様のみわざがある事を知り、苦勞が多ければ多いほど、私達が氏族の父母になるみわざがある事を感じて信仰生活をしなければなりません。

私達を天国に導きたいご父母様の93年間の愛の勝利圏が聖燭と聖塩には込められています。聖燭

を灯し精誠を尽くし一つになって、似る者になっていきましょう。

2012.2.19

【訓読】

●牧会者の道

「召命を受けた者たちの生き方」



1. ノア

彼は、サタンと対抗し闘って、自分をサタンから分立させました。神様は、彼を愛するようになり、彼は神様の愛の中に住むようになりました。しかし、それがすべてではありません。誰かが神様の愛の中に住むようになれば、神様はその人をサタン世界に送り出し、困難と苦痛の中で、その人自身を犠牲にするようにさせるのです。そこにはもちろん、彼を鍛練するという理由もありますが、全世界を救うために自分を精いっぱい犠牲にしようとする彼を通して、神様はもっと多くの人々を救おうとされるのです。義人であり、正直な人であり、善なる人であったノアは、いつも悲しい心情で、涙を流しながら、自分を犠牲にしなければなりませんでした。彼は自分のためではなく、他人のために自分を犠牲にしなければなりませんでした。

ノアじいさんは、迫害が激しく荒々しい環境の中でも、渾身の力を尽くしていったので、その環境に勝利することができたのでした。神様の法度の前に、息子としての忠孝の道理を尽くすだけだ、という謙遜な心をもって進んでいったのです。神様の前に進めば進むほど、環境の非情さを感じ、悲しみを覚えました。そのような時であればあるほど、ノアじいさんは、神様に申し訳ない心で悔い改めの涙を流していったので、彼の行く道を遮る者がなかったというのです。何の話か分かりますか？

ノア一人に対して、サタン世界は、打つすべての方法を動員し、反対するだけ反対しましたが、神様が中心として立てたその基準から見て、ノアは少しのずれもなかったのです。その基準は、宇宙の絶対的な中心として立てたものであり、宇宙の正義の人間として立てたものであり、真の勝利者として立てたものです。ですから神様は、この基準に反対するすべての怨讐の要素を清算させようとしたのです。このように、最後まで打たれていけば、素晴らしいことが起こるのだというのです。

聖書 マタイによる福音書 6章1節～4節

- 1) 自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないであろう。
- 2) だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならすな。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。
- 3) あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。

4) それは、あなたのする施しが隠れているためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。

【説教】

お父様は「伝道隊員がもたなければならない姿勢」のみ言で「いつも私がどうすればあの人を、先生に、あるいは皆さんに、導くことができるかを考えよ」というのです。ただ一つの方法がありますが、先生はその方法を知っています。それは他の人をあがめるという精神です。もし皆さんがその相手から、ある利益を受けようとすれば、障害が生じるようになります。皆さんがある人をあがめれば、皆さんは彼と近くなるのです。伝道は、自分のためのものではないという固い信念をもたなければなりません。

問題は、皆さんが一人の個人を救うため、彼にどれほどのエネルギーを投入することができ、彼の心を動かすためにどれほど与えることができるか、ということです。それが私たちの活動の核心です。このようにすることによって、皆さんは神様の心情を知り、神様がアダムにどれほど多くの力を注がれ、またアダムを復帰するため、どれほど多くの力を注がれたかということを知るようになるのです。皆さんが、その一人に皆さんのすべてのエネルギーを投入はできないといっても、「私はこの件では最善を尽くします」ということだけは決定されていなければなりません。

そういう心の姿勢をもってこそ皆さんは、神様がアダムを再び探した時の、喜びの涙を知るようになるのです。そして皆さんは、神様の心情を体恤するようになるのです。ゆえに、伝道に出て人に会うとき、皆さんは、それと同じような悲しみの涙を流さなければならないのであり、また神様が一人の人間について感じた愛を感じなければならず、その立場を感知しなければならないのです」

以上のように語られています。

伝道の目的はアダムの家庭を復帰することです。愛する息子、娘を失い、真の親になれなかった神様の身もだえする心情を体恤しなければなりません。

墮落しサタンの下に入った息子を復帰するために叱る事も出来ず、ただ尽くすしかない神様でした。崇めることです。その息子とは当時のアダムではなく私達の事です。私を復帰するために神様の血と汗と涙がありました。

また、新約聖書 コリント人への第一の手紙9章19~23節でパウロは、

「わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。すべての人に対しては、すべての人のようになった。なんとかして幾人かを救うためである。福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである」とあります。

パウロも僕、奴隷になって伝道したことが分かります。謙遜であったことが分かります。お父様が語られる「崇める」ことです。では、パウロはどうしてそこまでできたのでしょうか。それは人類を失った神様の悲しみの心情を体恤したからです。親不孝した息子は自分であると悔い改め

、悟ったのです。伝道こそ自らが神様の子供として帰っていく道であり、多くの人を帰す道です。そして神様の心情を体恤し、親と子という父子の因縁が結ばれます。神様の喜びの対象になります。神様を解放するために伝道に精誠を尽くしましょう。

2012.2.26



【訓読】

●牧会者の道

「召命を受けた者たちの生き方」

1. ノア

彼は、サタンと対抗し闘って、自分をサタンから分立させました。神様は、彼を愛するようになり、彼は神様の愛の中に住むようになりました。しかし、それがすべてではありません。誰かが神様の愛の中に住むようになれば、神様はその人をサタン世界に送り出し、困難と苦痛の中で、その人自身を犠牲にするようにさせるのです。そこにはもちろん、彼を鍛練するという理由もありますが、全世界を救うために自分を精いっぱい犠牲にしようとする彼を通して、神様はもっと多くの人々を救おうとされるのです。義人であり、正直な人であり、善なる人であったノアは、いつも悲しい心情で、涙を流しながら、自分を犠牲にしなければなりません。彼は自分のためではなく、他人のために自分を犠牲にしなければなりません。

ノアじいさんは、迫害が激しく荒々しい環境の中でも、渾身の力を尽くしていったので、その環境に勝利することができたのでした。神様の法度の前に、息子としての忠孝の道理を尽くすだけだ、という謙遜な心をもって進んでいったのです。神様の前に進めば進むほど、環境の非情さを感じ、悲しみを覚えました。そのような時であればあるほど、ノアじいさんは、神様に申し訳ない心で悔い改めの涙を流していったので、彼の行く道を遮る者がなかったというのです。何の話か分かりますか？

ノア一人に対して、サタン世界は、打つすべての方法を動員し、反対するだけ反対しましたが、神様が中心として立てたその基準から見て、ノアは少しのずれもなかったのです。その基準は、宇宙の絶対的な中心として立てたものであり、宇宙の正義の人間として立てたものであり、真の勝利者として立てたものです。ですから神様は、この基準に反対するすべての怨讐の要素を清算させようとしたのです。このように、最後まで打たれていけば、素晴らしいことが起こるのだというのです。

聖書 マタイによる福音書 6章1節～4節

- 1) 自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないであろう。
- 2) だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自

分の前でラッパを吹きならすな。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。

3) あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。

4) それは、あなたのする施しが隠れているためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。

【説教】

召命を受けた者たちの生き方を見たいと思います。

ノアに対して、お父様はみ言の中で、「彼は、サタンと対抗し闘って、自分をサタンから分立させました。神様は、彼を愛するようになり、彼は神様の愛の中に住むようになりました。しかし、それがすべてではありません。誰かが神様の愛の中に住むようになれば、神様はその人をサタン世界に送り出し、困難と苦痛の中で、その人自身を犠牲にするようにさせるのです。そこにはもちろん、彼を鍛練するという理由もありますが、全世界を救うために自分を精いっぱい犠牲にしようとする彼を通して、神様はもっと多くの人々を救おうとされるのです。義人であり、正直な人であり、善なる人であったノアは、いつも悲しい心情で、涙を流しながら、自分を犠牲にしなければなりませんでした。彼は自分のためではなく、他人のために自分を犠牲にしなければなりませんでした」と語られました。神様は最も愛するものを犠牲にして他を生かす道を選んでこられました。昨年の震災でも、救助に向かうレスキュー隊は危険であればあるほど最も訓練された最高の部隊を送ります。また、その部隊は日々、命を惜しむことなく人の為に生き、最悪は命を捧げる準備もあると思います。もし、命をおとす危険があり、わざと新米の部隊を送る司令官がいたら多くの人はどう思うでしょうか。非難する事でしょうか。では、私たちは日々の生活でどのような生き方をしているでしょうか。私たちは神様から召命を受けた氏族のメシヤです。私が最も愛し、優秀な子どもを犠牲にして他を生かすことが簡単でしょうか。また、自らが犠牲になって他を生かす生活がどれほどできているでしょうか。

日々の訓練が必要なのです。聖書のマタイによる福音書 6章1節～4節に、「自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないであろう。だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならすな。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。それは、あなたのする施しが隠れているためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」とあります。毎日の生活の中で褒められなくても、影で精誠を積む人を神様が愛される事が分かります。もちろん見える所で施しをする事が悪い事ではありません。イエス様は内的動機が義であるのかを問うておられます。動機がしっかりしていれば強く、優しく、不信する事がありません。不満もありません。動機が義であり行動する人を神様が愛し、神様の愛の中に住む事ができるという事です。神様の愛と一つになった姿です。毎日毎日一瞬一瞬の判断、動機がどうであるかを悔い改めなければなりません。私に試練が多いのであれば他を生かすための証しであり、神様に期待され、愛されている事を感じる事が

大事です。そのことが信仰を強くし、愛を大きくし神様の愛に生きる者になれます。

2012.3.4



【訓読】

天聖經 真の父母

真の父母は我々に絶対必要

真の父母が必要なのは、蕩滅条件を立てるため、そして、愛で一つになった基準で、伝授されるためです。

蕩滅復帰をするためには、絶対真の父母がいなくてははいけないのです。また、真の愛を中心として一つになるためには、真の父母がいなければならず、その次には、血統的に重生するにも、真の父母がいなくてははいけないのです。このように三つです。

新約聖書 マルコによる福音書4章2～20節

イエスは譬で多くの事を教えられたが、その教の中で彼らにこう言われた、「聞きなさい、種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種はいばらの中に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまったので、実を結ばなかった。ほかの種は良い地に落ちた。そしてはえて、育って、ますます実を結び、三十倍、六十倍、百倍にもなった」。そして言われた、「聞く耳のある者は聞くがよい」。イエスがひとりになられた時、そばにいた者たちが、十二弟子と共に、これらの譬について尋ねた。そこでイエスは言われた、「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。それは、『彼らを見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、悟らず、悔い改めてゆるされることがない』ためである」。また彼らに言われた、「あなたがたはこの譬がわからないのか。それでは、どうしてすべての譬がわかるだろうか。種まきは御言をまくのである。道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちのことである。すなわち、御言を聞くと、すぐにサタンがきて、彼らの中にまかれた御言を、奪って行くのである。同じように、石地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くと、すぐに喜んで受けるが、自分の中に根がないので、しばらく続くだけである。そののち、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。また、いばらの中にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くが、世の心づかいと、富の惑わしと、その他いろいろな欲とがはいつてきて、御言をふさぐので、実を結ばなくなる。また、良い地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのである」。

【説教】

今週は真のお母様をお迎えする大事な週です。沢山の精誠を積んでお迎えをしなければなりません。精誠は変わらない、諦めない信仰がまず必要です。

新約聖書、マルコによる福音書4章に、「種まきは御言をまくのである。道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちのことである。すなわち、御言を聞くと、すぐにサタンがきて、彼らの中にまかれた御言を、奪って行くのである。同じように、石地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くと、すぐに喜んで受けるが、自分の中に根がないので、しばらく続くだけである。そののち、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。また、いばらの中にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くが、世の心づかいと、富の惑わしと、その他いろいろな欲とがはいってきて、御言をふさぐので、実を結ばなくなる。また、良い地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞いて受けいれ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのである」とあります。イエス様のわかりやすい譬えです。では私たちはどの信仰生活をしているのかを考えて見なければなりません。三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶためには最初の3つを克服しなければなりません。この試練が必ず来ます。では、もう一つの見方をしてみます。親なる神様は信仰と愛のある畑に種を蒔きたいと願っておられるに違いありません。長い復帰歴史はまさしく、道端に落ち、いばらという欲に支配された私達をサタンから救済する歴史でした。畑の石を一つ一つ丁寧に取り除き、草を取り、茨を切り取り、種が育つように畑を耕す一人のお方がおられます。そうです、メシヤ、真のご父母様です。苦勞する道端のような私達を深刻に導き出そうとこの時間も諦めず精誠を積んでおられます。その事を忘れてはいけません。

ご父母様は、「真の父母が必要なのは、蕩滅条件を立てるため、そして、愛で一つになった基準で、伝授されるためです。蕩滅復帰をするためには、絶対真の父母がいなくてははいけないのです。また、真の愛を中心として一つになるためには、真の父母がいなければならず、その次には、血統的に重生するにも、真の父母がいなくてははいけないのです。このように三つです」と語られます。救いにはこの三つが必ず必要です。この全てを勝利されたお方から私たちは救ってもらわなければ自分の力だけでは不可能です。ご父母様と一つになる事です。一つの似たものになる事です。八つの教材・教本を訓読し愛し実践し、神様と一つになる事です。お母様は宇宙のお母さんであり私達を生みかえてくださる畑です。似た畑になり溶け合う事です。お母様をお迎えし、感謝し、感動し、希望を持ち新しい出発をしなければなりません。その一日を迎えるための精誠条件、努力が必要です。お母様の愛を相続し、どんな人でも愛し、育てていける畑になり、430の自叙伝、430の聖酒、3名の霊の子女、天福函を勝利できる私達になりましょう。

2012/3/11



【訓読】

真のご父母様の聖婚式（生涯路程より）

解放直後から7年と7年、満14年が過ぎたのち、聖婚式をしたのです。蘇生旧約時代、長成新約時代の基準を越えて、アダムとエバが長成期完成級で結婚したので、蘇生、長成の各7年の期間を越えて、完成蘇生級を連結させることのできる位置に出なければなりません。国家基準を越えなければならぬのです。

聖婚式をするのですが、その聖婚式は、自分の思いのまま女性一人を連れてきて、「します」と言ってできるものではありません。歴史を解かなければなりません。アダム家庭、ノア家庭、アブラハム家庭の縦的な二千年、そしてアダム、イエス様、再臨時代というように復帰歴史が流れてきたのです。お母様を選び立てるために、アダム、ノア、アブラハム以後、摂理史的に問題となった人物たち、歴史的に問題になったことに対して、蕩滅条件を立てました。

1960年に行われた聖婚式の背後には、アダム以後、イエス様の時までの四千年、イエス様から今日に至るまでの二千年の歴史過程において、引っ掛かったすべてのことを、蕩滅条件を立てて解決しなければならない内容がありました。それを準備するための1953年から1960年までの期間は迫害の時期でした。お母様を迎える前日まで、内務部で調書を捏造されたりしながら取り調べをされました。それでお母様まで呼ばれて行って戦わなければならなかったのです。イエス様が法廷で死んだので、法廷から取り戻してこなければなりません。蕩滅復帰です。11時に法廷で殴られながら、朝の3時に結婚式を始めました。そのような闘争のまっただ中において基準をつくったのは、万人の平安と喜びの幸福の基台をつくってあげるためなのです。

先生がそのまま満40の峠を越えれば大変なことになります。それで大急ぎでしたのです。それを偶然に越してしまうようになれば、すべてのものが、ぼとっと落ちてしまうのです。どれだけ深刻だったか、皆さんには分からないことでしょう。復帰路程で、この四十数を越えることがどれだけ重要な一つの峠であるかということ、皆さんは原理を通して学び、みな知っていることでしょう。四十の峠を越える時までは、死んではなりません。へたばってもならず、後退してもなりません。どんなに追われ追われても、最後まで前進しなければなりません。

怨讐に出会うその峠ごとに「私が倒れてはならない。私が死んでは駄目だ。私が死ねばこのみ

旨を誰が立てるだろうか。どんなに苦勞をしたとしても、四肢が切られ不具になり、伏して生きるとしても、私は死んではならない」と、どれほど心の中で念を押したか知れません。

来たるべき主の家庭はいかなる家庭でしょうか。悲惨というならば、それ以上悲惨な家庭がないくらい悲惨な家庭です。言い換えれば、その家庭においては、今までの歴史過程を通してすべての男女が引き起こした悲惨事が、少しの間でもかすめていくのです。そうでなくては蕩滅にならないのです。

それゆえに、その新婦が流さなければならない涙の種があるなら、それは歴史上の数多くの女性を代表した涙の種にならなければなりません。そして、耐えることがあるならば、それも歴史上の数多くの女性を代表した忍耐にならなければなりません。そして、男としてなさなければならないことは、心情世界において悔しい思いをしながら、犠牲を受けて愛の道を行った男たちがいるだろうし、無念な思いで愛の道を行った男たちもいるだろうし、「死んでもその道は行けない」と言った男もいるはずなのですが、彼らのそのような運命の道の責任を負って行かなければならないのです。そうせずしては、歴史上に絡み合った悪の根を根こそぎ抜き取ってしまうことができないのです。

【説教】

今日は3.11東日本震災から一周年の日です。死者、行方不明2万名近い方々が犠牲になり心からの祈禱を捧げなければなりません。

私たちは、貴い犠牲を無駄にせず、生きて地上天国を成すために更に精誠を積みたいと思います。

昨日は真のお母様の5年ぶりの来日で多くの恩恵を受けました。今日は札幌で大会です。犠牲になられた方々の為にこの時間、大会を通し、宇宙の母として日本の復興、勝利の為に沢山の涙をながされ、2万の魂も慰められていると思います。

それでは、何が希望でしょうか、

本来、アダムとエバが神様を中心として一体となり、真の父母にならなければなりません。そうすれば、「父母の日」が立てられるようになるのです。しかし、人間始祖が墮落することによって、このような「父母の日」を天も失ってしまい、地も失ってしまいました。それで神様は、本来計画されたことを成就するために、「父母の日」を取り戻すために、今まで経綸してこられたのです。

「六千年の復帰摂理歴史は、真の父母を取り戻すための歴史」と言っても過言ではありません。真の父母は、六千年の摂理史全体に代わる方です。それで、真の父母を取り戻すことができなかったことが、人類全体の悲しみに代わり、全体の苦痛に代わり、全体の悲哀に代わるということを、私たちは知らなければなりません。

お父様は、このように語られています。

「聖婚式をするのですが、その聖婚式は、自分の思いのまま女性一人を連れてきて、「します」と言ってできるものではありません。歴史を解かなければなりません。一九六〇年に行われた聖

婚式の背後には、アダム以後、イエス様の時までの四千年、イエス様から今日に至るまでの二千年の歴史過程において、引っ掛かったすべてのことを、蕩滅条件を立てて解決しなければならない内容がありました。お母様を迎える前日まで、内務部で調書を捏造されたりしながら取り調べをされました。それでお母様まで呼ばれて行って戦わなければならなかったのです。蕩滅復帰です。十一時に法廷で殴られながら、朝の三時に結婚式を始めました。先生がそのまま満四十の峠を越えれば大変なことになります。復帰路程で、この四十数を越えることがどれだけ重要な一つの峠であるかということ、皆さんは原理を通して学び、みな知っていることでしょう」

聖婚し父母になる事がどれほど大変な事でしょうか。父歴史、サタンとの戦いの連続です。震災で国家的・世界的な犠牲をはらいました。私達の家庭のサタン分立の内的四十数は何でしょうか？そのことが明確になっている方は希望であり、その背後には家庭に責任を持つ父母の愛を見ることができます。悔い改めの姿を見ることができます。神様が父母の位置に立つためには、私達が良き息子・娘、子供になると事です。完全な神様でも子供がいない淋しき、ただいないのではなく、偽りの親が主管している事が苦痛であり、心配です。抱きたいのに抱けない事情があり、恨があります。私達が神様を信じ、み言を实践する事が神様の解放になり、父母の位置に立たせる希望です。私達はその鍵を持っています。神様との共同作戦です。

そして、今もご父母様は四十数の峠、それは私たちの四十数を親として担って歩いておられます。

ご父母様が私に責任を取っておられ、愛しておられることが最大の希望です。

「父母の日」をもうすぐ迎えていきます。「父母の日」を迎えることは、父母である神様が訪ねていく家庭を作るためです。記念する日を祝うのは、その家庭の輝ける愛と理想を高める為です。父母の日を前にもう一度、その価値を知り、私達が氏族の父母として、希望になっていきましょう。

元気でいなさい、よく暮らしなさい、よく闘いなさい。

2012.3.18

【訓読】

原理講論より イエスと聖霊による霊的重生

父母の愛がなくては、新たな命が生まれることはできない。それゆえ、我々がコリント一二章3節に記録されているみ言のように、聖霊の感動によって、イエスを救い主として信じるようになれば、霊的な真の父であるイエスと、霊的な真の母である聖霊との授受作用によって生ずる霊的な真の父母の愛を受けようになる。そうすればここで、彼を信じる信徒たちは、その愛によって新たな命が注入され、新しい霊的自我に重生されるのである。これを霊的重生という。ところが、人間は霊肉共に墮落したので、なお、肉的重生を受けることによって、原罪を清算しなければならないのである。イエスは、人間の肉的重生による肉的救いのため、必然的に、再臨されるようになるのである

【説教】

これは日本に対するアボジの祝福のみ言です。

元気に頑張りなさい、幸せに暮らしなさい、全力投球、死生決断、無限疾走しなさいと言う祝福のみ言です。

原理講論の重生論と三位一体論の中で、父母の愛なくしては新たな命が生まれないとあります。アダムとエバの墮落によって霊肉共に墮落しました。

イエスを信じることによって霊的救いは受けられたけれど肉的重生が残っている。今回のお母様の来日によって、愛、祝福、配慮、激励、慰労を受けることが出来た。この来日の期間、肉的重生のチャンスになった。永遠に忘れることの出来ない時でした。お父様、お母様共に古希を迎えての来日であり、5年前とは全く違う次元の来日でした。

九州では生長の家のある人が神様からの啓示により2000羽の鶴を折り、自叙伝を通してお母様を知り、鶴を渡すことが出来た証しがありました。京都では会場に入れなかった食口に対して、モニター室まで訪ねて行かれ、食口を慰労されました。名古屋では、「故郷に来たようだ」と語られ、慰労され、またとても喜ばれました。札幌では2日間滞在され、朝の訓読会では700名が参加されました。

首都圏の大会では5500名が一人も公演中に席を立たなかった。韓国が感動していた。日本はマナーが一番よい。

全大会で、28000名参加。講演時間5時間23分。413回の拍手があった。



お母様は天正宮に戻られ、「困難な時に日本に行って最善を尽くしてきました。被災地の慰労に行ってきました」と語られました。

『元気でいなさい、よく暮らしなさい、よく闘いなさい』

今年、我々に胸に抱いていくみ言です。

残された一年を最高の実績を建てて、皆、勝利しましょう！

2012.3.25

【訓読】

天聖經 祝福家庭 三、祝福家庭の責任より

今の個性完成は、絶対的な全体個性完成になっていません。

条件完成です。復帰過程での条件完成ということを知らなければなりません。それで彼らが父母の立場に立っていますが、神様の心情圏というものを知りません。自分の妻は宇宙を与えても替えることができず、夫は宇宙を与えても替えることができず、二人が愛するそこに天地をつかんでいくことができる偉大な力があるということを体験できませんでした。

「私は祝福を受けたからもういいだろう！ じっとしていても天国だ」とそのように座っていれば、めちゃめちゃになるのです。祝福を受けたことが完成段階ではありません。皆さん、七年路程を習ったでしょう。このような複雑な内容を知って、合わせてくれる人がいないので、全能なる神様も仕方なく引っ張られてくるのです。皆さんが祝福を受ける時、「私たちは神様の原理原則に従って祝福を受けた。きょうから一つになった」と言いますが、一つですか。再び夫婦が再創造しなければなりません。

お互いに再創造しなければなりません。怨恨の夫婦の溝を埋めなければならない道が残っていることを、統一教会の祝福を受けた者たちが忘れてしまえば滅びます。私がいくら「滅びない」と言っても、滅びるようになっていきます。

父母の愛を受けるには、何をしなければならないのでしょうか。父母様が愛するすべてのものを愛さなければなりません。そうしてこそ、初めて愛されるのです。家庭でいえば、自分の親に愛されることを願うならば、その息子は親がもっているすべてのものを愛してから、愛されなければならないということを知らなければなりません。これをしないで愛されようという人は、どろぼうです。父母が貴く思うものをすべて自分勝手に引き継いで、愛されないのです。

皆さんは、真の父母の本当の息子、娘ですか。真の子女とは、何を中心としていうのですか。真の血統です。もちろん真の愛を通じて因縁をもちますが、成されるのは真の血統を通じて連結したということです。真の血統を通じて連結されたものは、お母さん、お父さんに似るのです。皆さんは先生に似ていますか。皆さんの目は青く、私は黒く、髪の毛も違うではありませんか。髪の毛がみな白いではありませんか。私は東洋人で、顔が平らです。

似るのは、一番の骨子だけが似ます。骨子だけが似ますが、どういうふう似るかといえば、サタンに勝つことと神様を絶対に愛することだけ似ます。それだけ似るといいます。そうしてサタンを主管して、コントロールするというのです。

旧約聖書 創世記 2章21節～25節

そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこら



れた。そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。

【説教】

昨日は「天地人真の父母勝利解放完成開門時代祝福式」があり、全世界に神様の息子娘が誕生しました。

もう一度、祝福結婚式について考えてみたいと思います。

お父様は、人は、「神様の心情圏というものを知りません」その心情圏の事を、「自分の妻は宇宙を与えても替えることができず、夫は宇宙を与えても替えることができず、二人が愛するそこに天地をつかんでいくことができる偉大な力があるということを体験できませんでした」と教えてください。神様が私達に対する祝福のみ言です。夫婦の姿、神様の似姿です。夫、妻をこのように愛せたらどれほどよいでしょうか。その夫婦はもっと子供を愛するでしょう。これが、神様が私達を創造された目的、動機、心情、愛です。

聖書の創世記2章を見ても夫婦が一つであることが分かります。人が一人でいるのは良くないと思われ、彼のために相応しい「助け手」を造られました。アダムを造られたように、土の塵から造ったのではなく、アダムのあばら骨を一つ取って女を造ったのです。アダムはエバを見て、「これこそ、ついに私の骨の骨、肉の肉」と言っています。骨と肉とは私の命の事です。自分の命に代えても惜しくない存在であります。

そして、あばら骨とは胸です。踏みつける足でもなく、手でもなく、顔、頭でもありません。胸とは人を抱く、愛を表現する場所、また心臓もあります。生命・愛を表す場所です。

アダムとエバが愛し合い、お互いが命に代えても惜しくない存在、宇宙を与えても替える事ができないという、天宙で一番愛する存在という事が分かります。

「助け手」というとアダムの下という印象を持ちますが、お父様は天のお父様と叫ぶ人はいますが天のお母様と叫ぶ人がいない、お父さんには、子供がいなければならず、子供は、必ず子供を産むお母さんがいなければなりません。神様の花嫁がいなかった事が神様の悲しみでありました。女性は神様の新婦です。同等の位置、それ以上に思う神様です。

そして、父母の位置を離れるとありますが、親と断絶する、不仲ではなく、一人立ちする事です。つまり、親なる神様の愛を相続した、完成実体になったことです。神様の住む家になったことです。裸が恥ずかしいとは思わないとは、お互いを信頼し愛し、相手の悪い部分も全て受け止める事です。相手を非難する事はありません。

これが神様が願われた結婚、つまり祝福の本来の姿です。

その為はどうすればいいのか、お父様は、「似るのは、一番の骨子だけが似ます。骨子だけが似ますが、どういうふうに似るかといえば、サタンに勝つことと神様を絶対に愛することだけ似ます。それだけ似るといなのです。そうしてサタンを主管して、コントロールするといのです」このように教えてください。

サタンとは他人ではありません。私です。私の中にあるサタンの考え、自己中心の情です。自分に勝つことです。そのために神様を愛する事、神様のみ言を愛する事、訓読し実践する事です。祝福は再創造です。お互いが汗、涙を流し、時には血を流す心情で愛した分、再創造が始まります。

宇宙は神様です。神様と代えても惜しくない存在が私達であり、神様が私を生かすために今も、命、愛を注いでおられます。親の情です。親とどこが「似ているのか、似たいのか」をもう一度祈り、神様が願う祝福家庭として歩いていきましょう。

「2012年は全国食口が自らのいかなる年よりも最高最大の奇跡的な実績を創出しましょう」

2012/4/1



【訓読】

天聖經 真の神様 三、神様は人格的な神様

神様はいったいどんな方なのでしょうか。全知全能で、遍在され、ただ一言で世界を殺したり生かしたりする……。そのような神様を私たちは必要としません。私たちの本心は、どんな神様を願うでしょうか。「愛をもって、私のお母さん、お父さん以上の愛で愛さざるを得ない方なのだな。我が国に義なる国王がいるとすれば、義なる大統領がいるとすれば、その国王以上、その大統領以上の方なのだな」と、こんな方を願います。

今日、この世界を探し求めてこられた神様がいらっしゃるとしたら、その神様は知情意を備えた神様であることに違いありません。なぜでしょうか。人間がそうだからです。それは人類を中心とした知情意ではなく、天倫を中心とした知情意です。

絶対的の神様は、悲しむことができるでしょうか、できないでしょうか。全知全能なる神様は、悲しみの場を避けることができるでしょうか、できないでしょうか。その悲しみとかかわることができるでしょうか、できないでしょうか。これは深刻な問題です。私たちのような人間は、それをそのまま通り過ぎることはできません。絶対的である神様は絶対的に悲しみがあってはならないと言うならば、その神様は知情意をもった、喜怒哀楽の感情をもった人間の父となることはできないのです。論理的に矛盾します。ですから神様は、私たち人間よりももっと喜怒哀楽を感じる主体とならなければなりません。

神様も知情意をもった方であられるだけに、神様にも願いがあり、事情があり、心情があります。神様の願いは何で、神様の心情が何で、神様の事情とは何でしょうか。人間の事情よりも先に知らなければならないこととして、これさえ知ればいいのです。これさえ知れば、自然に人の願いが何であるか一遍に分かるのです。なぜでしょうか。人間の目的は神様であり、神様の目的は人間なので釣り合うのです。人間の事情をよく知って、願いをよく知って、心情をよく知る人は、神様の願い、神様の事情、神様の心情と通じることができるのです。

ヨハネによる福音書 3章16節

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

【説教】

2012年は「全力投球、死生決断、無限疾走」の年

聖書ルカ17/33 「死なんとする者は生き、生きんとする者は死す」

320日後には天一国創建の基元節を迎える

2012年3月4日天正宮での訓読会のみ言

「全て成就した、これからは天一国創建の基元節のために開拓者の道を行こう」

母国日本の召命的責任分担の使命は「全力投球、死生決断、無限疾走」

これだけが、日本が生きる希望

① 乳を飲んだ力まで総動員しよう

最高最大の実績を立てて、先祖・後孫に誇らしい祝福家庭・食口になろう

② 最高の持続的精誠を捧げよう

神様と真の父母様が惚れて、手助けをせざるを得ないように、忠孝の道理を尽くす

③ 挑戦のチャンピオンになろう

革命的な挑戦の精神が必要

目標を立て、てできるまで全力を尽くしてやり続ける

④ 私の生涯が今年しかないと考えて走っていき ましょう

深刻さは、目標達成のための促進剤・推進力

深刻さこそは、霊界を動員させる

2012.4.15

【訓読】



天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会

公演文より抜粋

■新実体様相時代到来

皆様、今日の映像を通してご覧になられたと思いますが、今の時は、神様が摂理を完結させて、最終段階の収穫をする時です。何日か前には、ソロモン諸島のトニー・フィリップ首相が直接真の父母様を訪ねて来て、天のみ言に大きく感銘を受け、真の父母様の同盟国になることを誓って帰りました。これからは、天の働き手になって摂理の一線で走る勇将になるという覚悟を見せてくれました。そして、ネパールでは、今日、この時刻にも真の父母様から伝授された原理本体論講義を、国営放送局を通して全国民に教育をしています。

UNを中心とした活動も、いまや本格的に軌道に乗っています。私たち夫婦が創設した世界平和女性連合が、UN本来の創立目的とみ旨に一致する活動を広げてきた実績が認められ、UNに登録されている3千4百余りのNGOグループの中でも、最上グループである第一領域の中にいることはもちろん、女性の人権と子供たちの貧困問題と教育問題解決のための活動に卓越した実績を収めています。すでに何度か受賞することもありました。

また、最近では、共産主義者たちのいたずらによって私の手を離れたワシントン・タイムズも再び戻ってきました。これが奇跡でなくて何が奇跡というのでしょうか？

カイン圏の最高黑白指導者たちが一つになって、ワシントン・タイムズ理事会を中心として総合体制として、神様の祖国と故郷の意味を広げ、神様の主権の国を保護して行くでしょう。

皆様！すでに真の父母様を中心として世界が帰ってきています。歴史的な恩讐であった韓国と日本、日本とアメリカ、アメリカとロシアのような国々もルーシェルから受けた墮落の血統を根絶して、新しい天の血統を伝授されるために交替祝福結婚に汎国家的な次元から参与するようになるでしょう。

私が満天下に宣布して推進中である韓日海底トンネルプロジェクトとベーリング海峡トンネル事業も世界的な次元から宗教人達が先頭に立って、解放された神様をお迎えして完成するでしょう。

この世から神様の実存を否定する無神論の思想、共産主義を廃棄して、神様が本来理想とされた万民疎通-和通の世界を成していくでしょう。

人間始祖の墮落によって引き起こされた夜の神様、昼の神様、万王の王、そして真の父母、このように四大代表王たちの歴史的な葛藤と闘争も、ついに天地人真の父母様によって完全に解決されました。万人が平等であり、万国が兄弟国になって、“One Family Under God”の世界が皆様の

目の前から展開されています。

皆様全員は、この歴史的であり、摂理的な革命隊列から必ずや勝利者になってください。天地人真の父母様を通して賜る天運が皆様と共にあるでしょう。

皆様と皆様の家庭、そして国家の上に天の祝福が共にあることを真の父母様の名でお祈りいたします。

【説教】

神が実体として現れる時を迎えました。これから如何に実体で尋ねてこられる神様に喜びを返すか、これが信仰生活のテーマ。

私達が自信、勇気を持って生きていく事が神の喜び。私が嬉しいと神も嬉しい。

天地人真の父母の定着が如何にして成されるか。

実体とみ言の基台、実体基台によって成される。

実体基台とは血筋、血統、似姿を持って父母を実体で迎えるようになる。

血筋＝親子の因縁から来る。因縁を復帰し、血統を復帰し血統転換がなされ、祝福を受ける。

伝統＝真の父母の血筋を受け継いで伝統を相続する。

似姿＝真の父母になる。本質が父母と同じ。

訓読が大事。家庭の問題の70%が解決できる。

訓読:私を再創造する。明日を変えることが出来る。

神のみ言が私を直接主管する。無知には完成がない。

み言を知るとは経験する、体恤するということ。

訓読が蘇生的み言の宣布とするなら長生的なみ言の宣布は体恤するということ。み言のモデルとして生きる。

愛は語って教えるものでない。見せて教える。愛は語れば語るほど偽善者となる。

訓読で失敗することはない。実体で、生活で失敗する。

長がつくものはみなモデルにならない。

み言を語った相手がみ言の生活が出来る様になる。それが完成圏。

起源節までにみ言を学び、実践し、分け与えて、相手がみ言の完成実体になるようにする。

1人も祝福を与えてない←深刻に考えないといけない。

祝福中心家庭としての勝利。私が地域の中心家庭である。

神の祝福は私を通してまわりに祝福を与える。そう考える。私と関係のないものはない。

自分が傷ついているのに、人を元気に出来ない。

元気がなければならぬ。私の傷は家族の中にある。

治療しなければならぬ。傷があると成長しない。一子供のまま。(恨み、ねたみ) いかにか肯定的に、

いかにか感謝するか。感謝が健康に生きる秘訣。自分に余裕が出来て初めて人の苦痛が分かる。

私そのものが統一教会。私のイメージ＝教会のイメージ

最高のものを見せて初めて統一教会をアピールできる。

言葉遣いも大事。相手が必要なものを理解する。知る。

次に家庭完成。一関係性の回復。

関係性が切れている。回復が必要。関係性が切れていると子供の気持ちが分からず教育する。子供は受け入れられない。

親になる前に友達になれ。

友達に対してはいやなところでもついて行く。

友達とはまわりの誰もが去って行った時、私を訪ねてくる1人。私が友達になってあげる。

友達から兄弟になり、親になる。一霊の親

相手に教えるのではなく、聞いてあげる。

最後は主観性完成

主管とは責任を持つことである。子供に責任を持つとはその子供が立派に独立できるように育てる。

摂理の目標に責任を持つ。

三大祝福完成の道一信仰生活

生涯最高の実績を作る。記録を更新する。

そういう皆様、教会になるよう願います。

2012/4/22

【訓読】

天聖經 真の父母

今日は父母の日です。皆さんが孝行者になるには、父母がどんな方かということを知らなければなりません。皆さんは、果たして父母がどんな方かということを知っていますか？

教えられて知っているのか、本当に知っているのか、考えてみたことがありますか？

皆さんは、お母さんのお腹を通じて生まれましたが、養子・養女です。ですから、その父母の前に忠誠を尽くすべきです。そうして、皆さんが父母になれば、四位基台が成されるようになります。しかしながら、皆さんだけでは、絶対に、天の子女を持つことができないようになっています。天の子女を持つためには、明らかに天の父母がまず出てこなければなりません

ところで、このような父母が出てくるためには、長男がまず出てこなければならないのです。なぜなら、長男であったカインが天道に背いたので、神様の前に背いたカインの路程を逆さまに踏んで、神様に代わりうる位置まで上がらなければならないからです。

そうして、四位基台を成さなければなりません。そうする前まで、みなさんは全部赤ん坊です。赤ん坊です。ですから、世の中で、いくら優れていて、何がどうだという人だとしても、赤ん坊のような心情をを持たなければなりません。そうして、お母さんのお腹の中と、お父さんのお腹の中を通じて、再び出てこなければなりません。

本来人間は、横的な父母として、神様を縦的な父母として、縦横の父母の愛を中心として喜びの出発を見なければならなかったのが、起源地でした。それがサタンによって侵犯されたために、これを再び奪って付けて、真の父母の息子娘にならなければなりません。そうするためには、野生のオリーブになったために、真のオリーブの枝をもらって、接ぎ木しなければなりません。

人類の希望が何かというと、真の父母に会うことです。そうでしょうか？ 歴史的結実が何かというと、真の父母に会うことであり、時代の中心が何かというと、真の父母に会うことです。そこに接ぎ木された皆さんは、枝になるのです。そうではないですか？

今まで、歴史時代の願いは、全部未来にありました。しかし、今日皆さんの一生を中心とした真の父母との因縁は、永遠に一時しかないのです。一度しかない貴いものです。分かりますか？ 皆さんの先祖たちも持てず、皆さんの後孫たちも持てないのです。

【説教】

家庭盟誓は「天一国主人私達の家庭は真の愛を中心として」から始まります。私達は主人になる必要があります。これが原点にならなければいけない。土台が崩れては何年経っても家系が真の主人に



なることはない。

主人とは、真の愛とは、を学びたいと思います。

私達には心情の8段階があります。僕の僕はどういう段階か？人間として扱われない段階。ノアの時
は僕の僕であった。では、我々はどうか？僕の僕は直接的に神の言葉を聞けない。

僕はやっと主人の言葉を聞ける。モーセがそうであった。しかし、あれはだめ、これはだめと愛を感じない世界。

イエスはどうか、養子、血はつながってないが息子の立場。

息子とは血統転換された立場。我々は養子なのか、実子なのか？血統転換された立場です。お父様の
内外ともの子、娘。

しかし、形はそうだけれども、内的にはどうか？

今日のみ言の中で「赤ん坊です。ですから、世の中で、いくら優れていて、何がどうだという人だ
としても、赤ん坊のような心情をを持たなければなりません。」とあります。赤ん坊は、親が我が子
でないとと言っても離れない、親を疑わない。それが赤ん坊の心情です。親と切っても切れない関係
です。

では信仰も赤ん坊で良いのか？あれ頂戴、これ頂戴という信仰。私達は父母の心情を知る大人の信
仰を持たないといけない。そういう意味で私達はお父様から訓練されて、僕の僕の信仰から大人の
信仰に成長している。

延世大学の大学院の院長が統一原理を証しした。創造原理の「責任分担」に感動された。彼はクリ
スチャンの信仰は赤ちゃん、原理は大人の信仰であると証しされた。

僕と実子との違い。僕が主人を思う心情より、実子が親を心配する情に親は感動する。総会長が神を
思う心情は素晴らしい。

我々の信仰は僕を越えている。が、子供の信仰なのか大人の信仰なのか？

今日の訓読の中に「人類の希望が何かということ、真の父母に会うことです。そうでしょうか？ 歴史
的結実が何かということ、真の父母に会うことであり、時代の中心が何かということ、真の父母に会
うことです。未来の出発の基地が何かということ、真の父母に会うことです。そこに接ぎ木さ
れた皆さんは、枝になるのです。そうではないですか？今まで、歴史時代の願いは、全部未来に
ありました。しかし、今日皆さんの一生を中心とした真の父母との因縁は、永遠に一時しかない
のです。一度しかない貴いものです。分かりますか？皆さんの先祖たちも持てず、皆さんの後孫
たちも持てないのです。」とあります。私達は未来に希望があるという。未来ではなく真の父母と一
緒に生きているこの一瞬に希望がある。今、先祖は必死である。

教区長が豊田は兄として、姉として2倍3倍頑張ってきたとおっしゃって下さった。だから氏族に一
番責任を持つ立場である。

総会長「今年が最後だと思ってみ旨を歩んでいますか？」

そう思ったら一瞬一瞬が命がけ。

一瞬の過ちが一生を決める。永遠を決める言い徳積をする時である。「試練を感謝して悔い改めて越
えて行きなさい。」と言われました。

自分の信仰を試す時が今。

閏3月2日、もう一度来たので、柳寛順のごとく信仰を示す時が今。
解けなかったものが解ける時代。
もう一度確認して出発しましょう。

【訓読】

2012/5/13

マタイ 13章24～29

また、ほかの譬を彼らに示して言われた、「天国は、良い種を自分の畑にまいておいた人のようなものである。人々が眠っている間に敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った。芽がはえ出て実を結ぶと、同時に毒麦もあらわれてきた。僕たちがきて、家の主人に言った、『ご主人様、畑におまきになったのは、よい種ではありませんでしたか。どうして毒麦がはえてきたのでしょうか』

主人は言った、『それは敵のしわざだ』すると僕たちが言った『では行って、それを抜き集めましょうか』彼は言った、『いや、毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない。』



マタイ 13章36～43

それからイエスは、群衆をあとに残して家にはいられた。すると弟子たちは、みもとにきて言った、「畑の毒麦の譬を説明してください」イエスは答えて言われた、「良い種をまく者は、人の子である。

畑は世界である。よい種と言うのは御国の子たちで、毒麦は悪い者の子たちである。

それをまいた敵は悪魔である。収穫とは世の終わりのことで、刈る者は御使いたちである。

だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそのとおりになるであろう。

人の子はその使いたちをつかわし、つまずきとなるものと不法を行う者とを、ことごとく御国からとり集めて、炉の火に投げ入れさせるであろう。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。

そのとき、義人たちは彼らの父の御国で、太陽のように輝きわたるであろう。耳のある者は聞かす。

ヨハネの黙示録 16章13～20

また見ると、龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきた。これらは、しるしを行う悪霊の霊であって、全世界の王たちのところに行き、彼らを召集したが、それは、全能なる神の大いなる日に、戦いをするためであった。（見よ、わたしは盗人のように来る。裸のままで歩かないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身につけている者は、さいわいである。）三つの霊は、ヘブル語でハルマゲドンという所に、王たちを召集した。

第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声が聖所の中から、御座から出て、「事はすでに成った」と言った。すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起こり、また激しい

地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった。大いなる都は三つに裂かれ、諸国民の町々は倒れた。神は大いなるバビロンを思い起こし、これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。

島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなった。

御旨の道

◆人格

- ・人間は、まず必ず必要な人、いてもいなくてもいい人、いてはならない人がある。
- ・御旨の中で見物人となるな。祝いの席で不必要にうろうろする人は、全体に支障ばかりをもたらす。

◆御旨

神は一時と一人の方と一つの仕事のために六千年間み業をなしてこられた。ゆえに、この一人の方がなさる仕事と一時を裏切る者は六千年を裏切る者であり、反対に忠誠でもって迎える者は六千年の不変の忠臣として認定される。忠臣は六千年の恵沢を一身に浴びるであろうし、裏切り者は累積された罰を一身に受けるのである。

◆責任感

- ・勝利は、戦わずにあり得ない。死ぬか生きるかという闘いの末に、勝利は決定されるのである。
- ・勝利の栄光は、その戦闘の総司令官から始まるのであるが、共に参加した全戦友にもその栄光は、平等に分配される。

【説教】

2013.1.13 基元節がどれほど重要か？

再臨主を中心とした実体的、世界的カナン復帰と原理にあります。

様々な名節、記念日があるが、どんな日よりも基元節が重要であると強調している。なぜか？

3度のカナン復帰。第1次はモーセを中心とした民族的カナン復帰。

第2次はイエスを中心とした世界的カナン復帰路程。これが再臨主まで延長された。必ず勝利しなければならない。

今までの重要な記念日の全てが過程での摂理。勝利して宣布した基準なのでサタンも讒訴しようがなかった。今回は前もって定めて宣布した。神様の計画はすでに決められている。それを知っているお父様が、それに従って勝利して宣布してきた。今は、2013.1.13の計画に向かって歩んでいる。

基元節は歴史の転換点。紀元前BCとADのようにイエスの誕生を中心に歴史が転換した。

黙示録にあるように新天新地を迎える時代。お父様がゴールを切る時、私達はどこにいるのか？終末の時に最後の勝利者になろう。

ノストラダムスの予言 2012年の最後3回の日食後に滅びる。

マヤカレンダー 2012.12.21で止まっている。

中国の予言でも2012.12.21となっている。

終末の目的はサタンを中心とした悪主権を滅ぼし、神中心とした善主権になる。

基元節を目の前にした今はどういう時？善悪交叉する時。善悪が混同しやすいとき。ちょっと人間的に判断すればメシヤを不信しやすい。絶対的信仰が必要。間違っただ道に行きやすい。

キリスト教は信じれば救われるという。しかしそのクリスチャンでもサンデークリスチャンをよく思わない。信じるだけで実践しない者を嫌う。

お父様のみ言に「人間は必ず必要な人、いてもいなくてもいい人、いてはいけない人がいる。」とある。全体が忙しいのに、うろろうろする人になってはいけない。

メシヤの摂理に同参するには4つのことが必要。

①神様の解放②霊界の解放③人間の解放④万物の解放

4つを完成すれば神様の解放につながる。最も重要なキーポイントは人間の解放である。人間が解放されれば自動的に霊界、万物そして神様の解放になる。

人間解放の勝利が氏族メシヤ。

我々は先に来た者である。先に来た者が後にならないよう勝利しなければならない。最後に笑う者が本当の勝利者。

最後の勝利者になるにはどうしたら良いのか？

①終末期は善と悪が交叉する時、善と悪の分別をよくする。②終末はサタンと最後の決着を付ける時、善主権を復帰する為の最後の戦い、天一国を建てる。

お父様は世界の運命は「日本のやり方次第である」とおっしゃられた。我々次第で世界の運命がかかっている。基元節まで285日残った今、どれほど重要か。「死生決断、全力投球」これがお父様のみ言です。

③入籍をしなければならない。

王の玉印を受ける。受けなければ審判から避けることが出来ない。

【訓読】

2012/5/20

原理講論

アブラハムの象徴献祭

それでは、鳩を裂かなかったことが、どうして罪になったのだろうか。この問題は今日に至るまで、未解決の問題として残されてきた。これは、原理を通して初めて明確に解決されるのである。それでは、供え物を裂かなければならない理由はどこにあるのかということとを先に調べてみることにしよう。救いの摂理の目的は、善と悪とを分立させ、悪を滅ぼし、善を立てて

、善主権を復帰しようとするところにある。ゆえに、アダムという一人の存在を、カインとアベルに分立したのちに、献祭させなければならなかったことや、また、ノアの時、洪水で悪を滅ぼして善を立てた目的は、みな善主権を復帰せんとするところにあつたのである。したがって、神は、アブラハムをして供え物を裂いてささげるようにし、アダムやノアが完成できなかった善悪分立の象徴的摂理をしようとされたのである。

このように、アブラハムが鳩を裂かずにささげたことは、サタンのものをそのままささげた結果となり、結局、それはサタンの所有物であることを、再び、確認してやったと同様の結果をもたらしてしまったのである。

牧会者の道

祭物の復帰家庭

ですから、祭物時代において、善なるものを選んでみると、牛と羊と鳩だったのです。それでは、これらは何を象徴するのでしょうか？ 遠い山を見つめて、ものを噛んでいる牛は、復帰されなければならない人間を象徴しているのです。言い換えれば、日久月深（注：月日の長いことの意味で、ひたすら望むという意味をもつ）、復帰される日だけを待っている人間を象徴するということです。

また羊というものは、軟弱な獣です。図体は大きいのに、自分より小さい山の獣に捕まって食べられてしまうのが羊です。羊は、弱いものを象徴します。それでいて抵抗しません。羊は、主人がつぶす時も抵抗しない獣です。昔、祭事に使おうと羊を捕まえた時、抵抗した羊は祭事に使いませんでした。反抗せず、「メーメー」鳴きながら、ただ、同情を求めるように、物悲しく哀れに泣き叫ぶ、そんな羊だけを捕まえて、祭物としたのです。むやみに殴って、足で蹴って捕まえた羊は、祭物として使わなかったのです。また、鳩は何を象徴するのでしょうか？ 私たちはよく、「鳩のような瞳」と言います。「鳩のような夫婦」と言うのです。それは鳩が、愛を象徴するからです。

このようなことを見るとき、これらは獣の中で善なる意味で次元の高いものだということです。そ



うであるから、これらを獣の中から抜き出しました。人間は、それらのものと一つとならなければならないのです。すなわち、牛のような忠誠で、羊のように犠牲となり、鳩のように情的（愛）になれということです。言い換えれば復帰の内容を代表する万物を中心として一つとなり、神様と関係を結んでいけということです。

それでは、それらと一つとなるためには、どのようにしなければならないのでしょうか？ 反対にならなければなりません。僕に屈伏しなければならないし、嫁に屈伏しなければなりません。そうでなければ復帰ができません。皆さんが姿勢を変えなければ、絶対復帰ができないのです。

ローマ人への手紙 7章22節～24

すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。わたしは、なんとというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。

【説教】

私達は神様とサタンとの中間位置に立っています。神様とサタンと一緒に暮らしている立場であって、サタンとの関係を除きながら、神様との関係を結んで行くのが地上の生活、信仰生活であります。

創造原理によれば人間は本来、一人の主人にのみ対応するように創造され、神様も二人の主人に対応する立場に立っている人間を相手に創造原理的な摂理を行うことができないとあります。訓読したように、アブラハムの象徴献祭で供え物を裂くことは、善と悪を分立させ、悪を滅ぼし、その因縁を清算し、善を立てて、善主権を復帰する事にあります。つまり、供え物を裂くことで元の位置に戻る条件が立ち、所有権が決定されるという事です。

単なる三種の供え物でなく、牛のような忠誠心、羊のような犠牲心、鳩のような愛情を、神様に供え、神様と愛の関係を結んで、神様に所有される重要な摂理が隠されていました。

今、私達は神様に直接主管される時代を迎えています。

祭物を通し神様に侍る時代から私自身が供え物になり、私に神様が住んでも恥ずかしくない、直接主管される者にならなければなりません。

私の中からサタン分立、墮落性を脱ぐことが重要です。では、墮落性を脱ぐためには、私を愛し、なんでも要求に応えてくれる人が、墮落性を取ってくれるのでしょうか？それは違います。本当に墮落性を脱ぎたいなら、私以上に墮落性の強い人、私が苦手な、付き合いたくない人、迫害する人、恩讐になるような人が、私の墮落性を洗ってくれる人になるのです。これが信仰者、愛の法則です。その人を愛し、侍るのです。

迫害を受け、嫌な気持ちになるのは、私の中に墮落性が内在しているからです。

イエス様は、乞食のような姿で木の下に寝ながら、淋しい立場でも一人息子であることを生涯一度も変わる事はありませんでした。更に軽蔑され迫害され難しい対場に立てば立つほど神様との関係が強くなります。私は神様の息子であるという自分の位置を確立していきました。この事が

、神様が所有するイエス様です。私達はどのようにでしょうか？

ヨハネによる福音書5章に、「さて、そこに三十八年の間、病気に悩んでいる人があった。イエスはその人が横になっているのを見、また長い間わずらっていたのを知って、その人に、なおりたいのかと言われた・・・」という部分があります。「なおりたいのか」とイエス様が聞かれたのは、病人が怒るかどうかを聞いたのではないのでしょうか。池の水が動いたら自分も入りたいが、もう三十八年間もの間、自分が入ろうとすると他の人が先に降りて行くのです。彼は全財産を費やして、しかも三十八年間もかかって、治りたい一心で池に来たのに、イエス様は「お前も治りたいのか」と言って蔑視してみたのです。

医者でも、祭司長でもない、乞食のような青年がきて言うのですから、その生意気な言葉に対し、反抗したくなるのです。しかし、その病人は「はいそうです、助けてくれる人がいないのです」と謙遜に答えました。イエス様が起きてあなたの床を取り上げ、そして歩きなさいと言われ、その病人は癒されたのです。

私達は、自分以下の人頼み、命令を不快に思う本能があり、この為、血気に走りサタンが所有する人になってしまいます。病人はこれを勝利し神様に所有されたわけです。

いつも重大で重要な問題は、信じられる所がくのではなく、誰も信じられない所から来るのです。僕にも屈服し頭を下げるような親の情をもって、今までの姿勢を変える時、神様に所有される者になれるのです。

【訓読】

2012/6/10

御旨の道

天国に行く手続きは地においてなさなければならない。
天国に行くチケットはサタンがくれるのである。サタンに勝利しなければならない。
サタンを、神の息子の立場に立って主管しなければならないので、サタンに勝利しなければならない。



マルコによる福音書12章41～44節

イエスは、さいせん箱にむかってすわり、群衆がその箱に金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持は、たくさんの金を投げ入れていた。ところが、ひとりの貧しいやもめがきて、レプタ二つを入れた。それは一コドラントに当る。そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。みんなの者はあるあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」。

ルカによる福音書18章9～14節

自分を義人だと自任して他人を見下げている人たちに対して、イエスはまたこの譬をお話しになった。「ふたりの人が祈るために宮に上った。そのひとりパリサイ人であり、もうひとり取税人であった。パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようとしないうで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしてください』と。あなたがたに言う。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。

【説教】

聖句は、やもめの献金と祈りを捧げる二人の有名な話です。

やもめが献金したお金の額ではなく、自分を犠牲にし神様を愛する大きさを天は見ておられる譬えです。二人の祈りは、どちらの祈りを神様が義として祝福されかの譬えです。

どちらも共通する事は、知識も地位、名誉も財もある、世の中からは賛美され尊敬される立派な生活をしてきた人と、今日の食べ物、寝る所、生活に困っている、世の中からは蔑まれ、邪魔に

されるような全く正反対の生活をしている人が登場します。

貧しく献金するお金もなく、礼拝用の服もなく、汚い姿で、恥ずかしく、神様の前に出る事も出来ず、礼拝堂の隅に隠れるように跪き、神様の前にただ、罪人である事をお許してくださいと頭を垂れるしかない者と、収入の十分の一を捧げ、礼拝堂の真ん中に座り、自分は断食も立派に行い、法を破る事もなく正しい生活をしている事を自慢げに神様に報告し、隅に跪く乞食、取税人のような人間に生まれなかった事を更に自慢し自分の豊かさと比較し、貧しい人を見下す祈りを捧げている者です。イエス様は貧しいやもめ、取税人を祝福し義とされました。

礼拝、祈りは自分の自慢をする場所ではありません。神様を礼拝しなければなりません。悔い改め、神様の心情を知る時間です。神様は私達にチャンスを与えます。それは神様の愛、心情を相続し父子の因縁を結ぶチャンスです。神様は憐み深く、親なる神様です。

義とされなかった、金持ちとパリサイ人にどういうチャンスを与えたのでしょうか。

2000年まえのたとえ話ではありません。貧しい生活から抜け出そうと熱心に信仰を持ってきたが、生活が一向に良くなることもなく、もっと厳しくなったら私達はどのようにするのでしょうか。この神様はご利益が無いと不信しないでしょうか。やもめと取税人は環境がどんなに厳しくても呪うことはしませんでした。全ての環境を受け入れ、神様に感謝の祈りを毎日行ったに違いありません。信仰の動機、目的が貧乏から抜け出す外的なものではなかったからです。金持ちとパリサイはそばにいる貧しい者の信仰生活、祈りを神様の声として聴き、悔い改めのチャンスを与えたのです。しかし聞くどころか非難したのです。

私達は信仰が長くなると、信仰の規則や外的なものをいつの間にか見つめ習慣的な生活をしていないか、人をそのように見ていないかを注意しなければなりません。規則、法は勿論守るべきですが、その上にある愛を中心として行かないと、神様の声が聞こえず、神様が私の中に住むことが出来なくなってしまいます。それは私の中にいるサタンを分立するどころか同居させてしまうことになります。

文先生は「天国に行くチケットはサタンがくれるのである。サタンに勝利しなければならない。サタンを、神様の息子の立場に立って主管しなければならないので、サタンに勝利しなければならない」と語られます。天国に行く手続きは、毎日の地上生活の中でサタンが屈服する生活です。サタンは傲慢、自己中心、犠牲を好みません、これが栄養です。謙遜と感謝の生活で神様の声を聴き、サタンに勝利していきましょう。

1 人の人を探す神様

【訓読】

2012/6/17

牧会者の道

イエス様が十字架の道、ゴルゴタの山頂の寂しい道を行かれた時、誰をもう一度振り返ってみたのかといえ、愛する十二使徒の代表であるペテロを、もう一度顧みられたのでした。

それは、自分の後ろにまず最初に来なければならないペテロの心が、変わるのではないかと心配されたからです。このように、神様のみ旨を心配する自分の心が

悲痛であるにもかかわらず、愛する心でペテロを顧みられたイエス様のその視線を、今日皆さんはもう一度感じなければならぬのです。

しかし、ペテロは三度もイエス様を知らないと否認しました。それで、天のみ旨と完全に分離された立場に立つようになり、イエス様とは関係ない立場に立つようになったのです。このようなことを知っていたイエス様でしたが、地上の誰か一人でも死の道に向かっていく自分の後ろを死守し、心で、体で同情してくれる一人の人を探そうとされていたので、愛する第一弟子であるペテロを顧みられるようになったのです。このように、一人の真の人間を探そうとされた思いが、愛する弟子ペテロを見つめるその視線の中に染み込んでいたということ、今日皆さんは知らなければなりません。

神様の全体的な摂理に責任をもってこられたイエス様においては、このような立場に立つようになった時、これ以上悲しい場面はないでしょう。なぜならば、人間たちの不信によってゴルゴタの道、死の道を行く自分の使命を引き継ぐことのできる一人の人を探そうとする切ない心情を分かってくれる者が、一人もいなかったからです。それで、イエス様は、言うに言えない悲しみに染み入っていたのです。ただ神様だけが、イエス様の切ない心情を分かってくれ、イエス様の寂しい事情を心配してくださいました。

イエス様は、自分の三十余年の生涯の中で、ただ天の悲しい事情に代わって歩んできた苦勞の路程を回顧してみた時、人間に対し叱りつけたいし、地に対し呪いたい心でいっぱいでした。ところが、自分のそのような心を抑えて、自分の歩みをとどめ、従ってきているペテロを見つめられたのです。このようなイエス様の内的心情を今日皆さんが感じることはできなければ、イエス様を中心とする神様のみ旨を代わりに引き継いで、万民の前に潔い立場で立つことができないということを、皆さんははつきり知らなければなりません。

では、このように寂しく、苦難の路程で一生を終えるイエス様を見つめていたペテロの心は、どうだったのでしょうか？ 彼は過去にイエス様と結んだ本性の愛の因縁を忘れることができず、寂しい中で呻吟し、言葉もなく物悲しい立場に立ったこと、悲しいイエス様を侮辱し、罪のないイエス様を恨み、罪のないイエス様を縛り、引っ張ってゆくその姿を見ながら、ペテロ



の心ももちろん大変痛かったことでしょう。

しかしペテロは、イエス様が全人類を顧みられるための代表的な使命を帯びて来られたメシヤであると悟ることができなかつたので、弟子たちを代表して出ていくことができず、自分のことだけを考える立場に立ってしまったのです。このような立場に立っていたペテロの前に女中たちが出て、キリストの仲間ではないかと質問した時、三回も「知らない」と言うようになったのでした。このようなペテロ一人の姿が、地上の人間たちを代表する立場であったことを、皆さんははっきりと知らなければなりません。

【説教】

韓国の祝福家庭を中心とする新氏族メシヤ3600名原理本体論30日特別教育が終了しました。7月からは、日本の本体論特別教育が出発します。

真のご父母様が教育の価値をこのように語っておられます。

「再臨主の代身として、その位置を相続するための本体論が最後の教育です。皆さん何を誇りますか？ 真の父母と一緒に暮しましたか？ 真の父母と一緒に働きましたか？ 真の父母様の婚姻の宴に参加することができますか？ にかかっています。真の父母様の国がどこにありますか？ これを作るのに死生決断！ 全力投球！ しなければなりません」

氏族メシヤ・入籍の時代を迎えました。入籍するためには、出生届を出す場所、国が必要になります。では、私が入籍する所は神様の国です。この地球星が神様の願う地球、故郷になる事です。平和世界です。真のご父母様は私達の家庭が天国の起点であると教えてくださいます。まず、平和世界の天国は私の家庭・氏族になります。私達は氏族という国に入籍しなければなりません。氏族に平和で争いのない幸福な愛の国を成すかです。私が中心人物として犠牲的愛を家庭・氏族に投入し、氏族伝道をすることです。

今日、訓読した内容は、イエス様が十字架の道を行かれる時の心情であり、特に十二弟子の代表であるイエス様が愛したペテロにたいする心情です。裏切る事を知っておられたイエス様は、叱りつけたり、呪ったり、不平不満の心ではなく、ペテロの事を心配し、愛する心で見つめる姿でした。イエス様が十字架から助かりたくて、命乞いをする視線ではありません。最後の最後までペテロが悔い改める事を信じておられました。ペテロがイエス様を不信せず、一つになる事は、人類全てが神様の元に帰る事を意味していました。ご自身の命ではなく、ペテロの背後にある全人類の命を思い心配し涙されるイエス様でした。

自分の困難さや自分の悲しみ、自分の事情も忘れて振り返られるイエス様を見たペテロの心の中には、一大変革が起こったのです。三回も知らないと言ったにもかかわらず、心から自分の将来を心配して下さったのを見て、ペテロの感情は爆発したのです。主と共に喜怒哀楽を共にしてきた昔の因縁を感じた瞬間、自分の正体をペテロは知るようになったのです。自分がイエス様を信じる信仰と、イエス様が神様を信じる信仰には、天地の差がある事を感じ、悔い改めました。私達とペテロが異なる点はどこでしょうか。

真のご父母様も今、ペテロを見つめる視線で、自分の位置、使命を相続、引き継ぐことの出来る

一人の人を探そうと93年間の人生をかけておられます。70億の人類ではなく、愛する私一人を探し、私の背後にある氏族を救おうとしておられます。

一緒に暮らし、働き、動いて、婚宴に参加できる私になるために、氏族メシヤを勝利しましょう

。

私の位置、価値を知る一週間でありますように。

どんな人を相続者にしたいか

【訓読】

2012/6/24

真の御父母様の伝統相続の姿勢

皆さんは、皆さんの家庭の主人がどんな人だったらいいでしょうか。どんな人を主人の位置に置きたいでしょうか。父親でも、おばあさんでも、家族はみな、どんな人を相続者にしたいでしょうか。より愛する人です。おじいさんが最もその家全体を愛しているとすれば、家族はおじいさんにすべてを報告するのです。お父さんをさておいても、それはどうしよ



うもないのです。それゆえ、一つの主人となることのできる者は、愛の心をもって「ため」に生きる者です。愛の心をもってより「ため」に生きる者が、その愛の家庭の伝統を受け継ぐのです。より大きな愛をもって「ため」に生きる者が永遠なる相続系列に同参するということを知るべきです。

今までこの道を切り開いてきた神様の道がそうだからです。神様の築いてきた伝統を相続してやるには、皆さんがこの道を行かなければならないのです。皆さんが苦勞するのを見て喜ぶのではありません。苦勞して切り開いてきた、その心血を注いだすべての福の恵みを、皆さんに無条件に祝福してくださる天があるということを知らなければなりません。その位置で相続を受けてこそ栄光となるのです。神様はそこで暮らすのです。十字架で蒔いたのですから、十字架で取り入れなければなりません。それを知らなければなりません。涙で蒔いたので、涙で取り入れなければなりません。

真の愛を植えよう

愛によらずしては、一つにすることができません。二つを一つにするには、言葉をもっては不可能です。二つが一つになるためには何がなければならぬのでしょうか。物質によって一つになっている場合、物質がその場を離れたならば、逃げていってしまいます。第三者の紹介によって、ある事情を通して一つとなったとする場合、その人がいなくなれば去っていってしまうのです。二つが一つとなるためには、永遠に一つとなるためには愛がなければなりません。愛以外のものではなりません。

【説教】

神様はどんな人を相続者にしたいのでしょうか。普通、財産を相続する場合、法で決められています。神様が相続したいのは神様の復歸の心情・愛です。訓読した部分には、「家族をより愛する人、一つの主人となることのできる者は、愛の心をもってために生きる者が、その愛の伝統を受け継ぐのです」とあります。

では愛はどうしたら成長・完成する事が出来るでしょうか。「十字架で蒔いたのですから、十字架で取り入れなければなりません。涙で蒔いたので、涙で取り入れなければなりません」「その位置で相続を受けてこそ栄光となるのです」とあります。十字架・涙の犠牲の道を感謝して行く者が、愛があり、そういう人を相続者にしたい神様です。

復帰歴史の中で、カインとアベルはどうだったでしょうか、本来の相続者であったお父さんアダムの失敗を蕩滅復帰するために神様に供え物を捧げる摂理をなさいました。

アベルの供え物は受け取られ、カインの供え物は受け取られませんでした。アベルもカインも同じ精誠で供え物を捧げました。しかし、アベルはその出発点が神側であったため、受け取られました。アベルは「ありがとうございます」と言いながら溫柔謙遜でなければなりませんでした。そうしたらカインが殺すことはありませんでした。カインのはらわたが煮えくり返るほど、度を越えて喜んだのです。兄カインに自慢したのです。カインも供え物を捧げる精誠を尽くすとき、弟アベルより自分の方が勝っていると思う心があったのです。自分の方をまず受けて欲しいと願ったのです。しかし、全てが反対でした。血気になり殺したのです。アベルは神様の恩恵を受けたからと、自慢してはならず、恩恵を受けたならむしろ自分の不足を悟り「お兄さんすいません」と言わなければならず、神様に「神様、なぜ私の供え物だけを受けたのですかカイン兄さんの方がもっと素晴らしいではありませんか」と神様に訴えればどうなったでしょうか。間違いなく神様はカインを愛され受け取られたはずです。アベルは自分のできが良くて神様は自分だけが好きなので受け取ったと勘違いし傲慢になったのです。神様は外的な供え物が問題でなく、精誠の父子因縁、兄弟の因縁、愛の関係を取り戻すことが目的でした。別れた心情的絆を結ぶことが目的でした。これに失敗したのです。相続者になれませんでした。今、私達は氏族メシヤとしてアベルの位置に立っています。相続者にならなければなりません。アベルが決定されるためには一人ではできません。必ずカインがいなければなりません。アベルになる事ができません。そして、苦勞、犠牲、迫害というカイン的環境を私達は愛で越えなければなりません。伝道する目的も最初にカインを作ることであり、二番目にアベルの位置を決定する為です。アベルの位置にいる私達は、カインと一つにならなければ神様の前に帰る道がありません。アベルとカインが失敗した心情を私達は愛で越え、氏族を神様の前に帰す伝道を勝利し、神様の相続者になりましょう。

【訓読】

2012/7/1

牧会者の道より

自分の父母に対し孝行したいといいながら、兄弟同士争うようになれば、その孝行は成立しないのです。ですから、父母の心は、自分が尽くされるよりも兄弟同士もっと「ためにしてあげる」ことを願うというのです。父母を顧みなかったとしても、「母さん、ちょっと待って、僕、弟を愛してくるから」と言えば、「この子、これから役立つ子だ」と言うのです。そうでしょうか？

それと同じく、兄弟を父母以上に愛そうという人は、天国の境界線の中に永遠に住むことができます。兄弟を父母と同じように愛せない人は、ここから外れるのです。これは簡単です。その道理の根本を悟らせてみれば簡単です。それが分からなくて今までできなかったのです。それを皆さん知って、私たち食口同士一つになれるのかなれないのかが問題なのです。父母の前に孝行できない、そんな立場に立ったなら、父母のために精誠を尽くせない分、父母の代わりに食口のために与えなさいというのです。そうすれば、父母に孝行した以上のこととして、天は受けてくださるのです。そんな人は必ず祝福されるというのです。

ルカによる福音書15章11節～

また言われた、「ある人に、ふたりのむすこがあった。ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで、父はその身代をふたりに分けてやった。弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した。何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいきんがあったので、彼は食べることに窮しはじめた。彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。そこで彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。そこで立って、父のところへ出かけた。むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません』。しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』。それから祝宴がはじまった。

兄は父にむかって言った、『わたしは何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそ



むいたことはなかったのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません。それなのに、遊女どもと一緒にあって、あなたの身代を食いつぶしたこのあなたの子が帰ってくると、そのために肥えた子牛をほふりなさいました』。すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』」。

【説教】

墮落する事によって親なる神様との関係が切れてしまいました。主体を失ったのです。よって信仰生活は主体を決めて、主管される喜びを復帰しなければなりません。

主体に主管される喜びとは、外的に主従関係の事ではなく、親と子の関係からくる情です。自己否定をして相手の事情、心情をいつも気に向け、相手の心情の中で生きようとする事です。信仰生活で不信する事は、自分を肯定し、自己否定が出来なかった事を言います。

アダムとエバも結局、自分を否定し神様という主体を求める事が出来なかったのです。

信仰が幼い時は、自分を中心として主体を信じます。自分に相応しいとか、御利益とか、目的に合うなど、合理的な判断をします。しかし、信仰が成長すると自分中心でなく、相手の事情、心情を中心として、自分を自己否定して為に生きるように努力をします。

自分中心の動機から主体の動機を中心に生きるようになります。動機が主体の動機と近づくわけです。これは単に知的に動機が一緒という以上に、心情が近くなった、一致した事になります。主体に所有される喜びを感じることができます。

信仰生活が疲れる、苦しい、刺激が無いと言いますが、これは動機の転換が必要な時であり、成長するチャンスです。イエス様の当時も、自分は選民であり神様の仕事を良くしているというパリサイ人が沢山いました。しかし神様の最高の仕事は動機が日々成長する事が重要です。自分が困難な環境で動機を正し、再創造されることです。

今日、訓読した内容にもありますように、主体である親の願いは、一つです。それは人種、文化が違って共通的な事です。兄弟が仲良くし、助け合うことです。

放蕩息子の弟は、当時最も忌み嫌われる豚の餌でお腹を満たしたいと思うほど落ちぶれていた事が分かります。しかし、本心に立ち返り、「父よ、私は天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もうあなたの息子と呼ばれる資格はありません」と悔い改めをしました。父は全てを許し迎え入れてくれます。それも、一度も言いつけをそむいたことのない兄が、味わった事もない、見た事もない祝宴まで行いました。当然、兄の心は嫉妬、怒りがこみあげてきます。父は「子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである」

これが主体である親の心情・愛です。兄は一生懸命、父に仕えてきました。この期間、神様の願いは、何だったのでしょうか。仕事は立派に行いました。弟がいなくなり心配する父の姿を見

て知っていたはずですが。兄は自由に生きる、弟に対する父の心を理解し、父の事情、心情を自分のものとして共有できたらどんなにすばらしいでしょう。この兄は完全に主体の動機、愛を自分のものしたのです。全ての財も相続しますが、主体、親の心情を相続した愛の完成者になれたのです。弟は跪くでしょう。そういう兄弟を見るときその家庭が天国になり最高の親孝行を成したのです。信仰生活の中で動機を成長させ、自分中心でなく主体の動機、神様の動機に転換し生きなければなりません。その中に心情・愛が育まれます。多くの兄弟姉妹を父母の動機、願いを持って愛し、真の親孝行をしていきましょう。

【訓読】

2012/7/15

旧約聖書 民数記13章25～

四十日の後、彼らはその地を探り終って帰ってきた。そして、パランの荒野にあるカデシにいたモーセとアロン、およびイスラエルの人々の全会衆のもとに行き、彼らと全会衆とに復命し、その地のくだものを彼らに見せた。彼らはモーセに言った、「わたしたちはあなたが、つかわした地へ行きました。そこはまことに乳と蜜の流れている地です。これはそのくだものです。しかし、その地に住む民は強く、その町々は堅固で非常に大きく、わたしたちはそこにアナクの子孫がいるのを見ました。そのとき、カレブはモーセの前で、民をしずめて言った、「わたしたちはすぐにのぼって、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます」。しかし、彼とともにのぼって行った人々は言った、「わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです」。そして彼らはその探った地のことを、イスラエルの人々に悪く言いふらして言った、「わたしたちが行き巡って探った地は、そこに住む者を滅ぼす地です。またその所でわたしたちが見た民はみな背の高い人々です。わたしたちには自分が、いなごのように思われ、また彼らにも、そう見えたに違いありません」。



第14章1節～11節

そこで、会衆はみな声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。またイスラエルの人々はみなモーセとアロンにむかってつぶやき、全会衆は彼らに言った、「ああ、わたしたちはエジプトの国で死んでいたらよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに。なにゆえ、主はわたしたちをこの地に連れてきて、つるぎに倒れさせ、またわたしたちの妻子をえじきとされるのであろうか。エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか」。彼らは互に言った、「わたしたちはひとりのかしらを立てて、エジプトに帰ろう」。そこで、モーセとアロンはイスラエルの人々の全会衆の前でひれふした。このとき、その地を探った者のうちのヌンの子ヨシュアとエフンネの子カレブは、その衣服を裂き、イスラエルの人々の全会衆に言った、「わたしたちが行き巡って探った地は非常に良い地です。もし、主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行って、それをわたしたちにくださるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。ただ、主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。彼らはわたしたちの食べ物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません」。ところが会衆はみな石で彼らを撃ち殺そうとした。そのとき、主の栄光が、会見の幕屋からイスラエルのすべての人に現れた。主はモーセに言われた、「この民はいつま

でわたしを侮るのか。わたしがもろもろのしるしを彼らのうちに行ったのに、彼らはいつまでわたしを信じないのか。

【説教】

私達は生活の中でいろんな試練に遭いますが、その時に神様の願いが何であるのか、神様と一緒に越えて行く人と、自分の考え、習慣、経験で越えようとする人がいます。

旧約聖書にモーセがイスラエル民族をエジプトからカナンに導き出す話があります。移動する中、たくさんの奇跡を見ました。紅海が二つに分かれ、十戒の御言葉、夜には火の柱、昼には雲の柱が導き、何も無い荒野でマナとうずらが与えられ、水も与えてもらいました。カナンに近づいた時、モーセは12名の偵察隊を40日間カナンに送ります。12人の偵察隊はイスラエル民族の各部族の族長であり代表です。

10人が報告します。「そこは誠に乳と蜜の流れている地です。しかし、その地に住む民は強く、その町々は堅固で非常に大きく・・・」「そこに住む者を滅ぼす地です。またその所で私達が見た民はみな背の高い人々です。私達には自分が、いなごのように思われ、また彼らにも、そう見えたに違いありません」と、どう考えてもカナンに入る事は不可能であると不信仰の報告をしました。彼らの報告を聞いたイスラエルの民は泣き叫び夜を明かし、エジプトで死んだほうがましだった、エジプトに帰ろうと更に叫びました。

残りの2人のヨシュアとカレブは「私達が行った地は非常に良い地です。神様がその地を準備し導いて下さいました。神様が共にありますから恐れてはなりません。彼らは食べ物にすぎません」と信仰の報告をしました。イスラエルの民は信ずることができず、2人を石で殺そうとしました。40日間の偵察は単なる期間ではなく、たくさんの奇跡を見ても不信、不平、不満を言い、モーセ（神様）と一つになれなかった民の「サタンを分立」をする神様の目的がありました。

ヨシュアとカレブの報告に不信した民は、チャンスを逃し、一日を一年として40年の間、荒野をさ迷う事になります。

同じ環境に遭遇してもこのように真っ二つに見方が分かれてしまいます。

ヨシュアとカレブは、神様がいつも共にあり、神様に生かされた事を、荒野路程を通し悟っていたのです。現実是否定的な答えが正解かもしれません。しかし神様が共にあれば、神様が私に対する願い、意図がある事を知る事が出来ます。今ある試練は、私一人ではなく、家庭、氏族を代表して「サタン分立」をして欲しい願いがあります。

親なる神様の願い、意図を知る人は誰でしょうか？それは子供です。実子の信仰です。恵みだけ受けて、恩を忘れる僕、赤の他人になってはいけません。「サタン分立」の背後には神様が子を求める、一つになりたい愛の試練であり、神様も共に戦っておられます。

親と子の関係を回復するのが信仰の道です。自分の考え、習慣、経験も重要ですが、自分中心の方向になりがちです。私達は現実をどのように見つめるかで生き方が変わってきます。人への接し方が変わってきます。

考え、経験を信仰で勝る生活し神様に会おう歩みをしていきましょう。

復帰は信じ愛すること

【訓読】

2012/7/29

復帰は信じ愛すること (み旨と世界より)



神が人間を創造した目的は何か、というと神が信じてやり

たい、そういう変わらない人間だと、神が信じてやりたいと、人間がいくら変わっても、歴史を越えて、その基準を維持してこられたのが、神様である。さあ君たちは信じることのできない者でも、信じてやる。騙されても信じてやる。それが神様である。愛してやる、共に住みたがる。お父さんもそうだよ。父母がそうでしょう。信じられない者を信じてやる。その基準において、変わらない純粋な人間、そのような人にならないといけないということを我々は知っております。本当の人、真の人はその基準において、一致したところにおいて、満たすことができるのではないか。そういう人同士、信じ合う、愛し合う、共に生き合う、その世界が地上天国である。天国の世界である。君たちもそうでしょう。神様みたいな人を、旦那さんに、奥さんにと願うでしょう。それは同じである。

信じられない者を信じてやるし、愛されない者を愛してやるし、それは自分と共に住めないような者であっても、住みたがる。そのような思いが、変わらないでいくならば、必ずその人間は、そういうところを見合った場合は、感動して、再び帰る道があるから、神様は、今まで復帰の道をたどってきているというんです。イエス様が、聖人と言われるようになったのも、怨讐たちまでも祝福していった、愛していったということが、神様と世界中の人々を感動させたからです。共に住みたがる、共に信じたがる、そういう思いでいたのです。だから、イエス様は、歴史を動かしました。

聖書六十六巻、たくさんの方が書かれていますが、すべて総合すれば、信じることを、愛することを、共に生きなさい、とそれ以外にありません。では我々統一教会において、どちらがもっと純粋で、信ずべき人かと言うと、そうした場合、神様みたいに、それは信じられない立場にあっても、信じてやる、愛されないような立場であっても、愛してやる、共に住むことができないような立場であっても、住んでやるというようなことを、続ける人ならば、必ず、その環境において、その人は勝利する。

【説教】

信仰の道、つまり復帰の道は、信じること、愛すること、共に生きあうことです。

しかしそれは簡単な事ではありません。信じ、愛し、共に生きあい一緒に住むことは、サタンの試練に勝利し、サタンが自然屈服する道を行かなければなりません。

訓読したように、自分を迫害し、騙すような人を信じ、愛し、共に生きあうのです。敵、恩讐を

愛する心情が必要です。サタン屈服の典型路程を勝利したのがイサクの子のヤコブでありました。ヤコブはアベルの立場を蕩滅復歸するために、長子の嗣業を、パンとレンズ豆のあつものを与え、兄であるエサウから奪いました。ヤコブは長子の嗣業を重んじそれを復歸したので神様はイサクにヤコブを祝福させました。これに反しエサウはパンとレンズ豆のあつもので売ってしまう程度に軽んじたので神様は祝福されませんでした。これが第一祝福を復歸したことになります。

次に、ヤコブはサタン世界であるハランに行って、おじのラバンから10回も騙され、21年間苦勞し、家庭と財物を中心に、長子の嗣業を復歸する戦いに勝利しました。これが第2祝福を復歸したことになります。

そして、ヤコブは、ハランから神様が約束されたカナンの地に帰ってくる時、ヤボク河で天使との組み打ちに勝利して、実体で天使に対する主管性を復歸しました。これが第3祝福の復歸であります。

では、ヤコブはカナンに帰ってくるまでの21年間の受難の道をどうして越えることができたのでしょうか。ヤコブは家を出て、ハランに行ってラバンに10回も騙され、僕のように過ごしました。ラバンはヤコブが願っていたラケルの代わりにレアを与え、ラケルを得る為に更に7年も働きました。ヤコブはレア、ラケル、そのつかえめジルパとビルハの4人の妻を持つ事になります。姉妹とその姉妹のつかえめです。つかえめも最初は主人のレアとラケルの言う事を聞いていましたが、同等な妻の位置があるため自分の子を愛し、自分の子を立てようと必死になります。一人の妻を愛し主管するのも大変であるのにどのようにしたら良いのでしょうか。ヤコブは自分の好き嫌い、欲望、自己中心的にその妻子を愛したらその家はどうなっていたでしょうか。そこはサタン世界を象徴する環境です。サタンの誘惑には負けませんでした。口数を少なくし、口を開きませんでした。ヤコブはひたすら僕になって尽くしたのです。騙され続け、信じ続け、愛し続け、共に生き続けたのです。

それだけをしたのです。そして、4人の妻たち全員が父ラバンの側からヤコブの側に立ちました。その時がラバンの家から脱出する時だったのです。4人妻たちが一つになり、そしてヤコブと一つになりました。サタンが自然屈服したのです。ヤコブは賢く妻たちを治めました。

その基台を作って自分を殺そうとしているエサウの所へ行きました。21年間に集めた全ての財物を捧げたのです。ヤコブは地にひれ伏し、7回も敬礼をしたのです。そしてエサウに対して「あなたの顔を見て、神様の顔を見るように思います」と言って、泣きながらエサウを抱きしめました。自分の全てを与えて兄の心を奪ったのです。アダム家庭で出来なかったカインとアベルが初めて一つになりました。サタンが屈服したのです。

ヤコブは、21年間の受難があっても、神様の祝福は絶対に変わらないものであると最後まで信じていたのです。環境がどんなに変わっても、変わらないものがあると信じていたのです。この事が重要です。ヤコブは困難な中でも、騙す人々の為に祈禱する心を持っていました。

私達もどんな環境があっても変わらない存在を確信し、そのために信じ愛する生活の努力をしましょう。

【訓読】

2012/8/19

ヨナ書第1章

主の言葉がアミツタイの子ヨナに臨んで言った、「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの前に上ってきたからである」。しかしヨナは主の前を離れてタルシシへのがれようと、立ってヨッパに下って行った。ところがちょうど、タルシシへ行く船があったので、船賃を払い、主の前を離れて、人々と共にタルシシへ行こうと船に乗った。時に、主は大風を海の上に起されたので、船が破れるほどの激しい暴風が海の上にあった。それで水夫たちは恐れて、めいめい自分の神を呼び求め、また船を軽くするため、その中の積み荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船の奥に下り、伏して熟睡していた。そこで船長は来て、彼に言った、「あなたはどのように眠っているのか。起きて、あなたの神に呼ばわりなさい。神があるいは、われわれを顧みて、助けてくださるだろう」。やがて人々は互に言った、「この災がわれわれに臨んだのは、だれのせいかわかるために、さあ、くじを引いてみよう」。そして彼らが、くじを引いたところ、くじはヨナに当たった。

第3章

時に主の言葉は再びヨナに臨んで言った、「立って、あの大きな町ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ」。そこでヨナは主の言葉に従い、立って、ニネベに行った。ニネベは非常に大きな町であって、これを行きめぐするには、三日を要するほどであった。ヨナはその町にはいり、初め一日路を行きめぐって呼ばわり、「四十日を経たらニネベは滅びる」と言った。そこでニネベの人々は神を信じ、断食をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着た。このうわさがニネベの王に達すると、彼はその王座から立ち上がり、朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座した。また王とその大臣の布告をもって、ニネベ中にふれさせて言った、「人も獣も牛も羊もみな、何を味わってはならない。物を食い、水を飲んではならない。人も獣も荒布をまとい、ひたすら神に呼ばわり、おのおのその悪い道およびその手にある強暴を離れよ。あるいは神はみ心をかえ、その激しい怒りをやめて、われわれを滅ぼされないかもしれない。だれがそれを知るだろう」。神は彼らのなすところ、その悪い道を離れたのを見られ、彼らの上に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめになった。

第4章

ところがヨナはこれを非常に不快として、激しく怒り、主に祈って言った、「主よ、わたしがなお国におりました時、この事を申したではありませんか。それでこそわたしは、急いでタルシシにのがれようとしたのです。なぜなら、わたしはあなたが恵み深い神、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かで、災を思いかえされることを、知っていたからです。それで主よ、どうぞ今わたしの命をとってください。わたしにとっては、生きるよりも死ぬ方がましだからです」。主は言われた、「あなたの怒るのは、よいことであろうか」。



時に主なる神は、ヨナを暑さの苦痛から救うために、とうごまを備えて、それを育て、ヨナの頭の上に日陰を設けた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。ところが神は翌日の夜明けに虫を備えて、そのとうごまをかませられたので、それは枯れた。しかし神はヨナに言われた、「とうごまのためにあなたの怒るのはよくない」。ヨナは言った、「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」。主は言われた、「あなたは労せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」。

【説教】

預言者ヨナは、神様の啓示によって、ニネベの町を救いに行きます。

しかし、ニネベはイスラエルの敵国である、強大な軍事を持ったアッシリアの首都です。普通の町ではありません。ヨナはいろいろな心情を持ったのではないのでしょうか。

自分が叫んでも、神様の御言を信じる人々であろうか、それどころか不吉な言葉を語ったと、殺されるのではないかと。悔い改めする事はないだろうと、自分の力が及ばない事を感じたのかもかもしれません。

そこで、神様との約束を放棄し、船で別の町に行こうとします。しかし、神様は船が壊れるほどの嵐をおこし、あまりの激しさにこの原因を探すためにくじを引いてみるとヨナが当たりました。ヨナは神様からの言いつけを破った事を話し、海に投げ入れられ、嵐を静めるようにしました。神様は大きな魚にヨナをのみこむようにされ、3日三晩の間、ヨナの悔い改めを待たれました。そして再び神様の啓示を受け、従い、ニネベの町に予言・御言を伝えに行きます。

ヨナの心配は不要なものでした。人々はヨナの言葉を信じ、悔い改めました。噂を聞いた王までも国中に、人も動物も全て断食をし、悪い行いを悔い改めしなさいと、おふれを出したほどです。ヨナは驚いたことでしょう。異邦の神を信じる人々が悔い改めし、その結果、神様は滅ぼすことをおやめになりました。預言者から見ればこれほど嬉しい事、名誉はありません。しかし、ヨナはこれを非常に不快として『激しく怒り、生きるよりも死ぬ方がましだ、怒りのあまりに狂い死にそうです』と神様に叫んでいます。

どうしてでしょうか。神様はとうごまが一夜に生じて、一夜に滅びた事を惜しむヨナの姿に対し、『まして私は十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか』と語られています。

『神様はあなたが怒るのは良い事か』と質問をしておられます。何かに気づいて欲しい神様の心情・願いを感ずることが出来ます。ヨナが怒る理由は何でしょうか。人は自分の思いとは別の結果が出たとき、怒り、不快にお思います。今まで不義、不信仰を行ってきたニネベの人々がこうも簡単に救われる姿を見ながら、頭では万民救済はわかるが情が納得しなかったのでしょうか。もっと罰を受け、苦勞しむべきではないかと。自分は神様の使いとして、修行を積み、断食し、善を行い、生きてきたのに、何か妬み、嫉妬のような愛の減少感を感じたのでしょうか。ある一方では、そういう自分を許せない、情を主管できない自分自身が嫌になり、情をぶっつける所が

なかったのでしょうか。

では、神様の願いは何でしょうか。神様は父母なる親です。放蕩息子も恩讐も全て愛する親です。神様には二つの目的がありました。一つはニネベの町が救われる事、もう一つは、この事を通し、神様の親の心情を相続して、預言者から人類の兄、親になって欲しかったのです。お父様は、年頭に一つの似姿、一つの伝統、そのために全力投球、死生決断と教えて下さいました。そのためにも自己の考え、習慣性を否定し、大転換しなければなりません。基元節を迎える今、私達は、神様の心情をもって完成しなければなりません。親の情です。そのための環境、試練を神様が今私達に与えておられます。今までの生活を否定、悔い改めし、正午定着の生活を通し、神様の願いを知る生活をしていきましょう。